

(例)

適性検査Ⅱ

注意

- 1 指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 問題は1から2まで、5ページにわたって印刷してあります。
- 3 検査時間は四十五分で、終わりは午前〇〇時〇〇分です。
- 4 声を出して読むはいけません。
- 5 解答はすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

みたかち くちゅうこういっかん ねんせいがつこう かしやう

三鷹地区中高一貫6年制学校(仮称)

1 次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

転校生の「わたし」（小学五年生）は、まだ友だちと呼べる同級生もできず、学校でだれかと話したことも数えるほどしかない。仕事のいそがしい両親にかわって、いつもは学校から帰ると留守番をしながら弟のヒロのめんどうをみている。ある日、ヒロと久しぶりにきょうだいげんかをした。

翌日、転校してから初めて、学校帰りに寄り道をした。この町のことは、まだほとんど知らない。右に曲がるとどこに行くのか、この道路がどこにつづいているのか、なにもわからない。それがよかった。道がわからない不安よりも、いまは弟もお父さんもお母さんもいないんだなあ、という気楽さのほうが強い。このままどこか遠くに行っちゃいたいな、と思った。もちろん一人で。のんびり。わたしはもともと、ほんとうにおっとりした性格で、放っておいたらいつまでも外をぼーっと眺めているような子だったんだから。

こいのぼりを見つけた。桜もちの美味しそうな和菓子屋さんも見つけた。歩道の脇に咲いていたタンポポの綿毛を飛ばした。パングーのとてもきれいな庭があった。ブロック塀の上で猫があく

びをしていた。楽しい。うれしい。うきうきして、わくわくして、右、左、まっすぐ、右、左、まっすぐ、と思いつくまま交差点を曲がった。

気がつくともう陽が暮れかかっていた。街灯がともって、風が冷たくなって、夕刊を配達する原付バイクに追い越されて――それでやっと、弟が一人で留守番していることを思いだした。

帰らなきゃ、と立ち止まって振り向くと、目の前には知らない町の風景が広がっていた。

わからない。いまだどこにいるのか、学校がどっちの方角で、わが家はここからどれくらい遠いのか、なにもわからない。来た道を引き返して、ここだけ、違っただけ、と迷いながら交差点を右に曲がった。でも、右でよかっただけ、逆じゃなかっただけ、と不安になる。左だ、左、左に曲がらなきゃ戻れない。駆けだして、でもすぐに立ち止まって、違うよやっぱり右でいいんだよと思いついて、でもまたすぐに、うそだよ左だってば、という気になつてしまう。陽は見る間に沈んでいって、空はどんどん暗くなる。どうしよう。交番。おまわりさん。でも、交番がどこにあるのかもわからない。誰かに道を訊かなきゃ。でも、人影が見あたらない。どこかの家のチャイムを鳴らして道を教えてもらおう？

そんなの恥ずかしいし、どの家を見ても、中から怖いひとが出てきそうな気がする。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、とあせってきよるきよろしていたら、自転車のベルが後ろから聞こえた。

「なにしてんの？」

同じクラスの――誰だっけ、名前はわからない。でも、エンドウさんと仲良しの子だ。

「この近所なの？ ウチ」

わたしは首を横に振った。友だちというわけじゃない。でも、知ってる子だ。それだけで、もう、涙が出そうなくらいうれしい。

「道、わかんなくなったの、ごめん、学校までどう行けばいいか教えて」

「はあ？」

「迷子になっちゃった、わたし。早くウチに帰らなきゃ、弟が一人で留守番してるから、お願い、教えて、道、教えて……」

考える間もなく言葉が出た。自分でも気づかないうちに、両手で押むポーズもとっていた。

自転車の子は「えーっ、大変じゃん」とびっくりしてくれて、

「じゃあね、いちばん早い近道教えてあげる……っっていうか、自

転車の後ろ、乗んなよ。そのほうが早いから」と言ってくれた。

ほら、ほら、早く乗って。笑っていた。でも、二人乗りしたとセンセイにはナイショだからね。もっとなつこり笑った。

二人だけで話をしたのは初めてなのに、なつかしい。お気に入りのトレーナーに着替えるときの、顔と手が襟ぐりや袖口からスポンと出た瞬間のような、ああこれ、これだよやっぱり、という気分だった。

ずっと、そうだったのかもしれない。ほんとうはみんな、ずっと笑ってくれていたのかもしれない。

自転車の荷台にまたがった。しっかりとつかまってよ、と言われたので、荷台の前のほうをグツとつかみ、ナイショ話をするようにその子の背中に顔を寄せた。

「ねえ、ごめん、名前教えて」

「えーっ、知らないの？ 最初に自己紹介したじゃん」

「……もう忘れない、絶対に忘れないから」

「カワシマ。カワシマ、リナ。よろしくーっ」

カワシマさんがペダルを踏み込むと、すうっと風景が流れはじめた。

(重松 清「せいくらべ」による)

○ことばの説明

* 原付バイクげんぷき——小型のオートバイ

【問題1】

すうつと風景が流れはじめた。とありますが、この表現から「わたし」のどういう気持ちを読み取れますか。八十字以上、百字以内で改行せずに書きなさい。

〈注意〉書き出しの空らんはいりません。

、。はそれぞれ一字として数えます。

【問題2】

この話では、友だちに親切にされて、涙が出そうなくらいうれしく思った経験がえがかれています。

これまでにあなたがだれかに親切にされて、とてもうれしいと感じた経験を、百八十字以上、二百字以内で書きなさい。

〈注意〉書き出しの空らんや、。などもそれぞれ

一字として数えます。

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

「一人になる」時間の楽しさを知る

一人の静かな時間は、人を育てる。

人と楽しくコミュニケーションをする中でももちろん人間性は養われるが、一人きりになって静かに自分と向き合う時間も、自己形成には必要だ。音楽を聴きながらボーっと一人でいる時間も楽しい。

しかし読書は、一定の精神の緊張を伴う。この適度の緊張感が充実感を生む。読書は、一人のようでも一人ではない。本を書いている人との二人の時間である。著者は目の前にいるわけではないので、必要以上のプレッシャーはない。しかし、深く静かに語りかけてくる。優れた人の選り抜かれた言葉を、自分ひとりで味わう時間。この時間に育つものは、計り知れない。読書好きの人はこの一人で読書する時間の豊かさを知っている。

インターネットの隆盛に伴って、すべてを情報として見る見

方がいつそう進むであろう。素早く自分に必要な情報を切り取り、総合する力は、これからの社会には不可欠な力である。しかし、何かに使うために断片的な情報を処理し総合するというだけでは、人間性は十分には培われ得ない。

人間の総合的な成長は、優れた人間との対話を通じて育まれる。身の回りに優れた人がいるとは限らない。しかし、本ならば、現在生きていない人でも、優れた人との話を聞くことができる。優れた人との出会いが、向上心を刺激し、人間性を高める。

読書力さえあれば、あらゆる分野の優れた人の話を落着いて聞くことができる。実際に面と向かって話を聞く場合よりも、集中力が必要だ。言葉の理解がすべてになるので、緊張感を保たなければ読書は続けられない。自分から積極的に意味を理解しようとする姿勢がなければ、読書にはならない。読書の習慣は、人に対して積極的に向かう構えを培うものだ。

(齋藤 孝「読書力」による)

○ことばの説明

- *1 自己形成じこけいせい——自分自身をかたちづくること
- *2 隆盛りゅうせい——栄えていること
- *3 断片的だんぺんてき——きれぎれでまとまりがないさま
- *4 培つちかう——養い育てる

【問題】

この文章の内容から読み取ったことをもとにして、あなたにとって今までの生活の中で読書がどのように役に立ってきたかについて、あなた自身の経験をあげながら、二百六十字以上、三百字以内で書きなさい。

なお、具体的な書名や作者名は記入する必要はありません。せん。

〈注意〉書き出しや段落をかえた時の空らんや、「などもそれぞれ一字として数えます。」

